次代を拓く 2025 ▼4▲

転職 育林業務に誇り

わたらせ森林組合勤務
菊池　真寛さん(38)
＝伊勢崎市田部井町

わたらせ森林組合（みどり市東町花輪）の事務所で昨年12月末、菊池真寛さん(38)＝伊勢崎市田部井町＝が同僚と年末の大掃除に励んでいた。ネットワークの構築などを担う東京の商社から同組合に転職して5年目。地下足袋を履き、チェーンソーを整備する様子も慣れたものだ。

「自然に携わる仕事がしたい」と転職を決め、現在は同組合近くの山々に入り、主にスギやヒノキを植える育林業務に携わる。登山好きで、体力には自信があったつもりだが、険しい山道を進んでようやくたどり着く現場も多く、「慣れてはきているが、つらい時もある」と打ち明ける。

高崎市出身。藤岡市内の高校を経て、都内の大学に進学した。理系だったこともあり、卒業後はシステムエンジニアの仕事に就いた。入社後は主に金融機関のインフラを構築する業務を担当。年齢を重ねるごとに、できる仕事は増えていったが、多忙を極めた。

「帰りはいつも終電。仕事が終わったからというよりは、帰る手段がなくなるから帰るような感じ。納期が迫っていれば、そのまま仕事をすることもあった」。この先、結婚し、子どもを育てる未来を思い描いたとき、疑問が浮かんだ。「このままの働き方で良いのだろうか」

転機のきっかけは通勤電車のつり革広告だった。林業の魅力や内容を伝えるガイダンスの案内。会場が職場から近かったこともあり、様子を見に足を運んだ。

「仕事の幅を広げていきたい」と話す菊池さん

初回は仕事の内容を教えてもらう程度だったが、翌年も訪れた。

「『転職するならこんな仕事が良いかな』と思っていたけど、（転職する）踏ん切りがつかなかった」。2度目のガイダンスの後、県内での体験ツアーに参加。適性があるかどうか不安はあったが「やりたいならやれば」と周囲も背中を押してくれた。

都内のオフィスからみどり市の山林へ。取り巻く環境は変わり「自然の中で働いていることを強く実感する」。育林業務の傍ら、重機やチェーンソーを使い、木を切ることも。「一本一本、状況が違う。一つとして同じものはない」。切っている木はいずれも戦後、植えられたもの。歴史の重みと、継承していくことの大切さを体感する毎日だ。

課題はブランド力の向上。海外産に押され、国内の木材は勢いを欠く。仕事としての林業の魅力を高めていくため「付加価値を付けていくことが大事。アイデアを考えていきたい」と力を込める。

「大変な仕事だけれども、本当に良い仕事」。だからこそ、自信を持って周囲に勧められる環境に変えていくことの重要性を強く認識する。

（毒島正幸）